俺と妹と幼なじみが交わした約束

永久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と妹と幼なじみが交わした約束

【Ｎコード】
Ｎ４７９９Ｕ

【作者名】
永久

【あらすじ】
幼い時に妹をなくした兄虔。そのせいで家に引きこもっている。
そしてある日、部屋の窓を開けると一人の少女が抱きついてきた。
それは虔の！？…。
切なくて友情、青春ストーリー！

キャラ紹介

名前：喜多山（きたやま）　虔（けん）
年齢：中学三年生
性別：男の子
性格：暗い。内心は凄く器用で優しくて心配性で明るくて元気。
その他：幼い時に妹をなくした。
　妹の死にショックを受けて、家に引きこもってしまった。

名前：喜多山（きたやま）　真央（まお）
性別：女の子
性格：優しくて明るくて元気でお兄ちゃん想いで泣き虫。
その他：幼い頃に事故で亡くなった。
　霊の姿で虔の目の前に現れる。
　生まれつき体が弱かった。

名前：霧森（きりもり）　早苗（さなえ）
年齢：中学3年生
性別：女の子
性格：生意気で照れ屋で優しくて友達想い。
その他：虔と幼なじみ。
　昔よく虔と真央と遊んでいた。
　幼い時から虔に片思い。

名前：野田（のだ）　慎（しん）
年齢：中学3年生
性別：男の子
性格：生意気で口が悪くて努力家でちょい真面目で素直。
その他：虔と早苗と幼なじみ。

虔、早苗、真央とよく遊んでいた。
幼い頃から真央に片思い。
真央の死にショックだった。

「ねぇ…お兄ちゃん…真央…もう一緒に…居れないのかな？…。」
「そんな事……。」

1話　妹と再会

『お兄ちゃん！待ってよ！待ってよ！お兄ちゃん！…キャァ！』
『真央！？』

ハッ！
「！？…ハァ…ハァ…。」
少年の名前は喜多山虔。

もう…いないんだ…なんでいまさら…。

ガタッ！
「！？…。」
ガタンッ！
「うわぁ！？」
フワッ
「！？…。」
桜の匂い…甘い匂い…。
窓から誰かが虔に抱きついてきた。
「お兄ちゃん！」ニコッ
「真央！」
「お兄ちゃん！会いたかったよ！」ニコッ
この少女は喜多山真央。虔の妹。現在幽霊。
「何でお前！ここに！？」
「戻ってきたんだよ！お兄ちゃんと幼なじみにお願いを叶えて欲しくて！」
「お願い？」
「そう！」ニコッ
「何だよ？それは？」

「なんだったけ??」
「なんだよ。」
「エへへッ」ニコッ

変わっていない…成長はしている…可愛くて美人になったかな?…。

「だから、幼なじみを皆集めて!」ニコッ
「そんな事…もう…できるわけねぇーよ…。」
「どうして?」
「俺は…もう…。」
「お兄ちゃん…。」
「じゃあ!真央も!真央もお願いするから!ね」ニコッ
「そうだな…。」
虔は立ち上がった。

だけど…幼なじみにはお前は見えない…。

ガラッ

「久々だなぁ〜!やっぱりいいなぁ〜!この町は!」
「!?…。」
「皆元気かなぁ!」ニコッ
「元気だと思うぞ…。」
ボコッ!
「うぇ!」
「失せろ!」
「!?…」
「早苗だ!」ニコッ
「ん?…喜多山…。」
この不良の少女は霧森早苗。

「よう…。」
「どうしたの？」
「いや…お前に会いたいなぁーって…。」
「はぁ！？」
「勘違いすんなよ！ちょっと…来て欲しいんだよ…。」
「あっ…おう。」
早苗は顔を真っ赤にさせた。
早苗は虔について行った。
「で…なんだよ…。」
「…真央…が…。」
「！？…」
バシッ！
早苗が虔を殴った。
「！？…。」
「ふざけんな！真央はもういないんだよ！いつまでも！いつまでも！妹の事考えるのはやめろよ！
もういないんだよ！真央は！…もう死んだんだよ……。」
「！？…。」
虔は真央の方を見た。
ポロッポロッ
真央は泣いていた。
「知ってるよ…真央…知ってるけどね…皆に会いに来たんだよ…
真央ね…早苗…ごめんね…。」
「真央！…。」
「！？…喜多山！まだお前あたしをバカにしてんのか！」
「違う！」
「！？…。」
「俺は…もう…いい…。」
「喜多山？…霧森？」
「野田…。」

「慎…。」
「慎君…。」
真央は泣きながら驚きながら慎の名前を呼んだ。

2話　見える、見えない

「野田、ちょっと聞いてくれねぇーかな？」
「何だよ。」
「喜多山がさ～…今更…真央の話をするんだけど。」
「！？…」
「…。」
「真央はもういないんだよ…それくらい自覚しろよな。」
「！？…。」
「慎君！」
真央は必死に慎の手を引っ張った。
だけど…真央の姿は誰にも見えない。
見えるのは兄の虔だけだった。

「真央…。」
「もうしらねぇー！」
「お兄ちゃん！」
「あっ…。」
パシッ！
「？！…。」
虔が早苗の手をつかんだ。
「待てよ…。」
「！？…なんだよ！」
早苗は顔を赤くしていった。
「真央…。」
「いい加減威しろ！」
バシッ！
「てっ…。」
「いい加減にしろ！いつまでも子供で入れると思うな！あたしらは

もう変わったんだ！
いつまでも真央の死に構ってる暇なんかないんだ！」
「！？…。」
「早苗…酷いよ…。」
真央は泣いていた。
「早苗！」
「な…何よ！」
「謝れ！」
「はぁ？」
「真央に謝れよ！死んでるからってそんな言い方ないだろう！」
「！？…何よ！別に本当の事言っただけじゃん…
それにあんただけよ今でも真央の事を思い続けてるバカは！」
「早苗！…もういい…。」
「お兄ちゃん…。」
「帰ろう…真央…。」ニコッ
「うん…。」
「！？…。」
早苗に一瞬だけ見えた…成長をした…真央の姿が…。

「真央？…。」
「お前もおかしくなったか？…霧森。」
「そんな訳ないだろうが！バカ！」
「本当に変わったな」ニコッ
あれは…真央！いや幻覚だ！幻覚！幻覚！…。
ガチャッ
「お兄ちゃん…。」

「ごめん…力に慣れなくて…。」
「お兄ちゃん…ううん…時間はいくらでもあるんだよ」ニコッ
「そうだな。」ニコッ
「うん！」ニコッ

やっと…真央がまともに笑ってくれた…。

「お兄ちゃん…真央ねできることあるか分からないけどね…頑張りたいんだ」ニコッ
「そうだな…。」ニコッ

幽霊でも夢でも幻覚でも俺は…もう一度真央を守るんだ…。

3話　秘密基地

タッタッ
朝、雨が降っていた。
だけど俺は…小さい頃４人で作った秘密基地に行った。

「あっ…。」
「！？…喜多山…。」
「霧森…。」
秘密基地の前には早苗が居た。
「何してるんだ？お前。」
「それはこっちの台詞、昨日は真央で今日は秘密基地？ふざけないでよ！」
「ふざけてなんか…。」
「真央真央！っていつまでもね！真央の事思ってんじゃないわよ！はっきり言ってうっとうしいのよ！こっちは忘れたいのに！忘れられない！あんな事がなかったら…あたしは…。」
ポタンッ…。
「霧森…。」
「なんなのよ！あんたは！何！？意味わかんないし！昔から…あんた…いつも…。」
早苗の目には涙が零れ落ちていた。
そうだ…いつも喜多山の目には…真央…しか写っていなかったじゃん…。

「ごめん…。」
「！？…なんであんたが謝るのよ！」
「いや…その…俺が悪いのかなぁ～って…思ってさ…。」

「なんなのよ！バカじゃないの！」
「顔真っ赤だぞ。」
「なっ！もう見るな！」
「アハハハハハッ」
「笑うな！」
「ハハハハハッ。」
「プッ…アハハハハハッ」
二人は大爆笑。
「明日も、ここに来てくれるか？昼に。」
「いいけど。」
「真央も連れてくるからさ。」
「…それって…幽霊って意味だよね？」
「おう…。」
「あたしに見えるかな？…。」
「わかねぇーよ…。」
「それもそっか…じゃあ明日…。」
早苗は雨の中を走って帰った。

『あたしに見えるかな？…。』

見えるか？…それは…わかんねぇーけど…。

ガラッ
「お兄ちゃん！お帰り！」
「ただいま。」
真央の動きが止まった。
「真央？」
「お兄ちゃん…優しい気持ちになってる！」ニコッ
「そうか？。」
「うん！いい事あった？」

「明日な。霧森と会う約束した。」
「会うの？」
「真央も一緒に行くんだぞ」ニコッ
「うん！」ニコッ

真央の笑った顔は…向日葵の花のような明るくて優しい笑顔――――。

4話　受け入れてくれる人

「お兄ちゃん？もう行くの？」
「おう。用意しろよ。」
「うん！」ニコッ
ガラッ
「あっ…。」
「真央？」
「ここ…真央の部屋…まだ残してくれてるんだ。」
「真央…。」
ポタンッ
「エへへへッ…嬉しいよ凄く…。」
「行くぞ。」
「うん！」ニコッ
ガラッ
「走れ！」
「うん！」ニコッ
二人は走った。

そして秘密基地にやってきた。

「！？…。」
「あっ！慎君！」
「何で…。」

昨日約束したのは早苗だけだったが、慎も秘密基地に居た。
「霧森から、聞いた。真央も来てるんだろう？どこに居るんだ？」
「！？…。」
「慎君！真央はここだよ！」

「いないんじゃないか…やっぱり嘘か。もうやめろよ。そんな一人演技。」
「一人演技じゃ…ない！」
「じゃあ真央はどこにいるんだよ！」
「それは…」
「やめなよ！」
「霧森…。」

「ごめんね…真央泣き虫だから…。」
「！？…。」
「皆には…真央が見えないんだよね？…そんな事知ってるよ。
真央ね…いつも…ずっと…皆と一緒に居たいって思ってるからね」
ニコッ
「！？…。」

真央――――。

「いるんだよ！受け入れなくてもいい！だけど真央は俺の隣にいるんだよ！」
「！？…お兄ちゃん…。」
「喜多山…。」
「真央は俺の隣にいる！俺達3人に願いを叶えて欲しくて戻ってきた！」
「ふざけるのも…。」
「ふざけてない！俺は…俺はもう一生妹を失いたくない！
だから願いを叶えたい！だから俺は…。」
「あたしは信じる。」
「えっ？…。」
「昨日ね…喜多山の隣に一瞬だけ真央と同じ女の子が一瞬見えたの。
」

「！？…。」
「だからあたしは喜多山を信じる。」
「ありがとな」ニコッ
「べ、別にあんたのためじゃないから！」
早苗は顔を真っ赤にして言った。

ポタンッ
「真央！？」
真央は目から大粒の涙が零れ落ちていた。
「どうしたの？」
「真央が泣いてる…。」
「えっ？」

「真央は、凄く嬉しいよ今！」ニコッ
「！？…そっか」ニコッ
「真央の手…どこ？」
「待てよ。ほら。」
早苗の手の上に真央の手を追いた。
「！？…何か寒気って言うか…。」
ポタンッ
「！？…水？雨降ってないのに？…。」
「早苗…ありがと」ニコッ
「！？…真央…。」
「えっ？見えるのか！？」
「早苗！」
「うわぁ！？真央！？」
真央は早苗に抱きついた。
「真央ね、嬉しいよ！」ニコッ
「真央…あたしも嬉しいよあんたにまた会えて。」
「早苗…。」

真央は大泣き。

「俺には見えない…真央…。」

「慎君…。」

「やっぱり…お前は俺だけを恨んでるのか？…。」

「違うよ！真央はね…慎君を一番…。」

「真央…。」

「ごめんね…慎君…真央…悪い子なんだよ…。」

5話　妹と幼なじみ1

慎だけに…真央が見えない…。

「真央、何してるの？」
「ご飯、作ってるんだよ」ニコッ
「そっか、ありがとね」ニコッ
「うん！」ニコッ
「で、あんたは何考えてるのよ。喜多山。」
「慎の事。」
「！？…。」
「何で慎には…真央が見えないんだろうって。」
「そんな事…。」

「あぁ！！！！！！！！」
「何よ！」
「出来たよ！！！！！」
「ん？」
真央がお盆でオムライスを持ってきた。
「うまそう！」
「そうでしょう！？」
パクッ！
「うっまー！！！！！！！！」
早苗は大喜び。
「おいしい。」
「本当？」
「おう」ニコッ
「嬉しい！真央嬉しい！」ニコッ
「そっか。」

真央の頭を撫でる虔。

だけど…なんでだろうな…。

何で慎には真央が見えないんだろう…。

どうして早苗には…。

”信じる約束”??…。

なわけねぇーか…。

「チッ！」

6話　妹と幼なじみ2

「でね！早苗！」
「何？」
「真央ね、皆に叶えて欲しい願いがあるの！」
「何？？」
「それはね…なんだろう？」
「えっ？自分が忘れてどうするの？」
「あっ思い出した！耳貸して！」ニコッ
真央は早苗の耳に囁いた。
「ふ～ん…分かった、協力するわ」ニコッ
「ありがとう、早苗！」ニコッ
「何話したんだ？」
「お兄ちゃんには内緒！」ニコッ
「？？」
「エヘッ！」ニコッ
「はぁ～…。」
ガラッ
誰かが虔の家に来た。
「すみません。」
「ん？」
真央と虔と早苗は玄関に行った。
「慎！」
「慎君！」
虔の家に慎が来た。
「真央…いるか？」
「いるけど、俺の隣に。」
「そうか。」
「慎君…。」

「真央…どこにいるんだ！」
「慎君…真央はここに居るよ？」
「やっぱり…俺は見えない。」
「慎君…。」
「真央…手を握ってくれ…頼む！」
「いいよ…。」
真央は慎の手を握ろうとする。
「！？…。」
真央の手が慎の手をすり抜けてしまった。
「真央…。」
「慎君…ごめんね…真央…慎君の手握れないよ…。」
「喜多山、真央は俺の手を握ったか？」
「…あぁ～握ってる…ちゃんと。」
「そうか…あんまり感覚がない…。」
「で、何しに着たんだよ！」
「……。」
「こんなことしにきただけじゃないだろう！」
「俺…明日引っ越すんだ。」
「！？…。」
「知らせるつもりはなかった…真央がいるから…。」
「なんだよ！お前冗談だろ？…。」
虔は信じられなかった。
ポタンッ…。

「だから…その前に真央が見れたらなって…。」

「慎君…。」
真央の目には、涙が零れ落ちていた。

「真央…。」

「今、真央どんな顔してる？」
「…ないてる…。」
「！？…。」
「慎君…。」
「そっか…俺もう行く。じゃあな」ニコッ
「！？…慎…く！」
「真央！」
真央は慎の背中に抱きついた。
「！？…。」
「慎君…行かないで…。」

真央…。

7話　願い

「真央！…。」
「慎君…私が見えるの？」
「見せる…俺にも…真央が見える。」
「慎君…。」
ポロッポロッ
「なくな、真央。」
「だって…慎君が！」
真央は大泣き。

「で、お前らいつ帰るんだよ。」
「あたし、家でした。」
「はぁ！？」
「何かいつも反抗してんのに、昨日はやけに向きになってさ親が。
そしたら出て行けって…。」
「ふ～ん…。」
「俺は、引越しがいやで逃げてきた。
「何で逃げるんだよ！」
「だってさ！真央にやっと会えたんだぞ！」
「はいはい。」
虔はあきれた半分諦めていた。
「はいはい、じゃあこの家で好き勝手にしてくれ。」
「ありがとう！」
早苗と慎は目を輝かせた。
「はぁ～…。」
「お兄ちゃん、ごめんね。」

「いいよ。」ニコッ
「うん！ありがとう」ニコッ
「で、真央あの事いう？」
早苗が真央に聞く。
「あの事？」
「？？」
慎と虔は首を横に振る。

「真央の願い。」
「！？…。」
「真央の願いはね！。」ニコッ
「真央…。」
「真央の願いは皆でおにごっこやかくれんぼをする事！」ニコッ
「はぁ？」
「そう言う事！」
「じゃあ真央が鬼ね！」ニコッ
「もう始まるのかよ！」
「ニコッ」
「！？…。」
虔は驚いた顔をした。

俺は一瞬見てしまった…真央の体が一瞬透けているのを…。

8話　雨の日の本音

「お兄ちゃん！おっはよー！」
「うわぁ！？真央！」
真央が虔に抱きついてきた。
「どうしたんだ？」
「ううん！たたね、こうしたいって思っただけだよ」ニコッ
「そっか…。」
「あっー慎！早苗！」
「な、何よ！急に下の名前で呼ぶからビックリするでしょうが！」
「あっ悪い。」
「何だ？」
「二人で昼飯の買出し行って来てくれないか？」
「それくらいなら、いいけど。」
「分かった。」
「サンキュッ」ニコッ
そして二人は買い物に出かけた。

「お兄ちゃん…。」
「ん？何だ？」
トンッ
「！？…。」
真央が虔の背中に頭を当てた。
「どうした？…。」
「…お兄ちゃん…。」
「真央…？！…。」
真央は震えていた。
ポタンッ
「お兄ちゃん…真央…消えちゃうのかな？…。」

「!?…真央…。」
「エヘヘヘッ…こんなこと言うなんて…真央らしくないかな?…。」
「そんな事ない…。」
「…お兄ちゃん…。」
「真央!」
「!?…。」
真央は目から大粒の涙を流していた。
「お兄ちゃん…。」
「俺にだけ…わがまま言っていいし本音だって弱音だって言っていい!
だから!俺を信じろ!」
「!?…。」
「お前は願いが叶えば成仏するかも知れない、だけどそれはまた生まれ変わる事。
分かったか?」
「うん!」ニコッ

成仏がどんなに怖いのか…真央も知ってるよ…。

9話　時間と手紙

真央は少しずつ…力をなくしていた。
もう体も薄くなってきていたんだった…。

「真央？」
「お兄ちゃん…真央は…真央は…。」
「なぁー真央。」
「何？」
「俺や、早苗、慎に手紙を書いたらどうだ？
一生残るし」ニコッ
「うん！ありがとう…お兄ちゃん…真央嬉しい…。」
ポロッポロッ
「真央？…。」
「だけどね…真央消えるのがとっても怖い…震えが止まんないよ。」
「大丈夫だよ…俺がいるから。」
「お兄ちゃん…ありがとう。」

真央は手紙を書き始めた。
時間が過ぎることに手紙が出来ていく。

「真央…もう休め。」
「駄目だよ！皆に手紙書かないと」ニコッ
「真央…。」
「エヘッ」
フラッ
「真央！」
バタンッ

「死んでるけど…体はまだ本物かもしれない。」
「……真央…。」
「もう起きないのかな？」
「早苗！何言ってんだよ！」
「慎…。」
「真央は起きる！」
「真央が倒れるってことはもうすぐで成仏しちゃうってことじゃないの！？」
「！？…早苗！お前」
「うるさい！」
「！？…。」
虔が怒鳴った。
「静かにしてくれ…。」
「悪い…。」
「ごめん…。」

起きろよ…真央…起きてくれ…頼むから…。

9話　時間と手紙（後書き）

次回で最終回です！

最終話　俺と妹と幼なじみが交わした約束（前書き）

感動の最終回です！

最終話　俺と妹と幼なじみが交わした約束

『真央！俺な将来家の庭にこんな森いっぱいな自然を作るんだ！』
ニコッ
『真央もお兄ちゃんのお手伝いするよ』ニコッ
『ありがとうな！真央』ニコッ
『うん！』ニコッ

俺は昔から、真央の笑顔を見るのが好きだった。
だけどもうそれは叶わないのか？…。
お前はまた俺の前で消えてなくなるのか？…真央…。

「お兄ちゃん…。」
「真央！」
「…真央…ね…お手紙書く…。」
「！？…もう…いいよ…。」
「お兄ちゃん…。」
「何だ？…。」
「真央のお願い…聞いてくれる？…。」
「おう……。」
「約束の……森に…連れて行って…手紙を持って…。」
「分かった…。」

早苗と慎と虔は真央を抱きかかえて幼い時約束を交わした森に来た。
この森はとても大切な思い出の一つ。

「真央…。」

「お兄ちゃん…これね…早苗や慎君に…渡して…。」
「分かった。」
真央は木にもたれて座っていた。
虔は早苗、慎に真央が書いた手紙を渡した。
「！？…。」
早苗は手紙を開いた。
ポタンッ
早苗の目には涙が零れ落ちていた。

『早苗へ
いつも真央の事を思ってくれてありがとう＾＾
そんな早苗が大好きだよ…。』

「真央…？！…。」

「！？…。」

『慎君へ
いつもありがとう。真央の事を思ってくれて…。
真央も慎君の事大好きでした＾＾』

ポタンッ…。

「！？…。」

『お兄ちゃんへ
真央の事を一番思ってくれて…ありがとう。
真央も一番お兄ちゃんが大好きだよ』

「真央…。」

「皆…ありがとう…。」ニコッ
真央は笑いながら泣いていた。
「真央…。」
「私も真央が大好きだよ！」
「！？…。」
「俺も大好きだ！」
「！？…。」
「真央！」
「！？…お兄ちゃん…。」
「俺もお前が大好きだ！だからまた会おうな！」ニコッ
「！？…うん…真央楽しみに待ってるね」ニコッ
「！？…。」
真央は消えてしまった。

サヨナラ……。

5年後
「真央、もう5年…俺は今でもお前との約束を忘れないよ。」
「本当だね」ニコッ
「そうだな。」
「お前らか。」

『ありがとう…みんな…。』

「！？…。」
「おう。」

『いつか４人で世界を笑顔に出来るようになろう！』ニコッ
『うん！真央賛成！』ニコッ
『分かったわよ。』
『おう！』ニコッ

最終話　俺と妹と幼なじみが交わした約束（後書き）

最終回でした！
どうでしたか？
他の小説もよろしくお願いします＾＾。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4799u/

俺と妹と幼なじみが交わした約束

2011年7月10日15時43分発行